

# 「旧正」宣言」補遺

永積安明

一九八三年の正月号「図書」（岩波書店発行）に、わたしは「旧正」宣言」と題して次のような雑文を寄稿した。早くも五年が過ぎてしまったが、その後思い出してみると、この巻頭随筆欄は紙幅が狭く字数もきまつているので、そのとき原文を少々削ってしまったし、大事なことを言い遺してもいるのが気になっていた。

さいわい機会を与えられたので、そのとき割愛した文章を復元するとともに、その遺漏を補っておくことにしよう。まず原文のままを復元すると次のようになる。

## 「旧正」宣言」

年の瀬が近づくと、郵便局が赤い色の年賀葉書売り出し、メ切りの日をきめて年賀状を督促する。いつも葉書は買いおくれ、メ切

りにせつかれて機械的に年賀状を書くこととなる。郵政省のために書いているようで、めでたくも何ともない。もうやめようと毎年思いつながら、未だにやめていない。全くの惰性である。それがまた、おもしろくない。日本人は昔から太陰暦で正月を祝ってきたのに、いったい誰が太陽暦に切り換えたのかと思つていたら、

今般太陰暦を廃し太陽暦御頒布相成候に付、来る十二月三日を以て明治六年一月一日と被定候事（太政官布告第三百三十号、明治五年十一月九日）

という明治天皇政府の「御頒布」によるのだった。

明治政府は沖繩をはじめ日本全国の生きのいい方言を抹殺したと同じ手口で、陰暦の五節供も抹消した。おかげで桃の節供も陽暦の

三月三日、庭の桃の蕾はほころびもせず、雪が降ったりする時期に雛祭である。

節は五月五日にしくはなし。菖蒲・蓬など、どのかほりあひたる、いみじうをかし。『枕草子』がたたえた端午の節供も、太陽暦の五月五日では、「菖蒲・蓬などのかほりあひたる」とはゆくまい。

まして七夕の節供は梅雨中である。陰暦七月になれば、ようやく秋の気は通い、空は高く澄んで天の川がさやかに見え始める。牽牛・織女の星々が、年に一度の出逢いを遂げるにふさわしい美しい夜を迎えるのである。このなつかしい民俗も明治五年十一月九日以來、破壊されてしまった。梅雨も明けやらぬ陽暦七月七日では、天の川も見えないからである。「文明開花」の国是は、こうして日本人の繊細な季節感覚を磨滅し尽し、国民はい

つの間にかダンブカーによる「開発」騒音にも不感症になる下地を「造成」されてしまったのだ。

正月も郵政省規制の年賀葉書で、せわしない名簿整理の日になりさがり、めでたくも何ともない。もうよそ。今年こそは官制のメ切り日など無視して、賀状もゆっくり拝見、沖縄ではまだ広く生きている「旧正」を取り返し、おだやかな旧暦元旦を寿ぐことにしよう。

いま、この随想を読み返してみると、明治以来の「文明開化」をはじめとする日本の近代主義的な政策を批判して、うっぶんを晴らしているようなところがあって、いささか説得性に乏しいのではなからうか。

旧暦に伴う古来の優雅な民俗を破壊したのは、明治政府の強権による「近代化」政策であったに相違ないが、この政策をささえ輪をかけて推進した、国民のがわにも責任があるはずだからである。

たしかに近ごろの七夕祭りは、わが家の孫娘たちが千代紙を折り、たとたどしいクレヨンの文字を書きつけ、庭の小さい笹の葉に結びつけて遊ぶ「たなばたさま」の行事とし

て、かすかに生きながらえてはいるものの、大人たちの七夕節供はといえば、町の商店街をあげての行事、赤・青・黄のビニール色紙

の派手なビラビラの垂れ流し、さてはその年のテレビの大河ドラマとやらの主役たちの人形飾り付けであり、町内こぞつての審査会があつて、年々大がかりの出品作が一等賞・二等賞を競い合い、牽牛織女の逢う瀬にあやかる七夕祭りとは何の関係もない。あるのは飾り物を出品した某々商店の名がその年の話題になり、町中に広告されるということであ

る。たまたま時は中元大売出しの季節、商店はいよいよ派手に趣向をこらして競演するのだが、ゆかしい星祭りなどどうでもよく、わが店の名が町民の間に爆発的に拡まることこそ本命なのである。

もともと本来の「中元」は上・中・下元の中元つまり旧暦七月十五日の節日にあたり、太陽暦に換算すると八月下旬になる。八月下旬ではすでに定着した六・七月かけての大売出しの季節にははずれてしまい、何より大事な商売にならなくなってしまふ。何しろ経済第一主義で世界に覇をととなえ、ゴッホもセザンヌもマネーもピカソも、およそ泰西の名画を買ひあさり、世界の画商を尻目に掛けて

何十億でも買いまくっている、生き馬の目を抜く日本商人の経済大国、七夕姫の嘆きなど問題にもならない。

儲かりさえすればよいからである。このことにつけても思い出すのは兼好法師の言葉である。彼は当時の「大福長者」つまり大富豪の言葉を『徒然草』の中に書き留めている。

人は万をさしおきて、ひたふるに徳（所得）をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。

人間何をさし置いても専ら金を儲けるべきである。貧乏では生きているかいいない、金持ちだけが人間だと断言しているこの語録こそは、現代日本人が拳々服膺すべき生活指針、まさに最高の箴言であるだろう。聡明な兼好法師はおよそ六百五十年前に、早くも現代日本人のありようを見とおしていたのだ。わたしのささやかな『旧正』宣言など、この兼好の語録にくらべても、まことに説得性に乏しいことを改めて自覚し、隨筆を求められたこの機会に、とりあえず補足することにしたわけである。